

いま開く 宝庫の内容と歴史

いま明かされる真実

南葵音楽文庫と徳川頼貞を知る 3冊

紀州徳川400年、南葵音楽文庫の公開を記念し、この世界的な音楽文庫と音楽による貢献に生きた徳川頼貞を紹介する書籍が同時に刊行されました。この3冊には、今までほとんど知られなかった文化の豊穡と先駆的な行動、そして人間味が盛り込まれています。南葵音楽文庫を知り、それを巡る、そこから広がる世界を学び、楽しむことにつながるでしょう。



紀州徳川400年 南葵音楽文庫案内

ISBN: 978-4-12-005418-1

A4判 オールカラー 96ページ

ベートーヴェン自筆楽譜ファクシミリ付き

中央公論新社 3300円

初出版。世界的な音楽コレクションの内容を紹介する最初の書籍。紀州徳川家第16代当主・徳川頼貞が私財を投じて蒐集した音楽文庫の全容を明らかにし、至宝のかずかずを、カラー図版と共に解説しています。また徳川頼貞と音楽のかかわり、父で南葵文庫開設によって日本の図書館史に重要な足跡を残した徳川頼倫についての章をもうけ、紀州徳川家の文化貢献の歩みを簡潔に紹介しました。柳宗悦『手仕事の日本』、南方熊楠「柳田国男宛書簡」、島崎藤村「飯倉附近」、W.M. ヴォーリス「徳川侯爵家の音楽堂」など、関連する文章やその抜萃を、さらに文庫が和歌山県に移管されてから3年あまりの間に新たに収録・収集した資料写真、関連画像を500点以上収めています。

寄稿/執筆: 徳川宜子/泉 健、近藤秀樹、佐々木勉、山東良朗、篠田大基、美山良夫、林 淑 姫



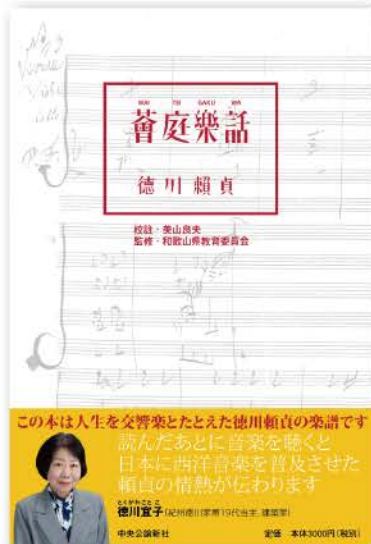
徳川頼貞侯の横顔

ISBN: 978-4-12-005420-4

四六判 204ページ

中央公論新社 2200円

初出版。著者喜多村進(1888-1958)は、徳川頼貞の父・頼倫が設立した南葵文庫、頼貞の南葵音楽図書館の司書として、また側近として身近に頼貞に接していました。田山花袋、島崎藤村に師事私淑した文学者でもあった彼が、素顔の頼貞を描写した肉筆原稿が残されていました。90年ちかく、人知れず残されてきた原稿からは、頼貞の人柄や足跡が、いきいきとたどれます。頼貞が喜多村進にあてた書簡等を付録とし、校註・解説を附しています。



わいていぐわ 會庭楽話

ISBN: 978-4-12-005419-8

四六判 384ページ

中央公論新社 3300円

著者徳川頼貞(1892-1954)は、紀州徳川家の第16代当主でした。英国ケンブリッジ大学に学び、日本に西洋音楽を根付かせるため音楽堂や音楽図書館を設立しました。ブッチーニ、プロコフィエフ、カザルス、コルトー、クライスラー、ジンパリスト、ニキシュ、ブゾーニといった大音楽家たちの交友や秘話がつぎつぎに紹介されます。戦時下の出版統制のため大幅に削除・改変される前の、ごく親しい人だけに配られた「幻の」私家版を復刊しました。読みやすいように、新字新かなにあらためたほか、校註・解説を附しています。

美山良夫

あの日の朝、総べては始まった。県立博物館の、普段は資料撮影等に使われる、窓のない大きな部屋。予め閲覧をお願いしていた喜多村進関連資料のなかに、その肉筆原稿はあった。『徳川頼貞侯の横顔』を繰りながら、軀が震えはじめるのを感じた。もっとも親密な、愛情溢れる言葉で、頼貞の人となり、音楽への貢献、立ち居振る舞いが綴られているのではないかと。

思えば、ずいぶん長い間、頼貞とは本当はどういう人だったのかと、自問する日々が続いてきた。時代は頼貞を忘れ、ときには誤解さえしているように思えた。だからこそ、90年近く、おそらく誰もが見ないままであったこの肉筆は、今こそ世に出るべきだ、いや、出さなくてはならない、と心に誓った。おそらく、同じ場に居合わせた人も、同じ思いであったろう。2017年5月12日。昼食をとるため館外に出ると、陽光が眩しい。清々しい、気持ちが漲る朝であった。

胚胎した思いに陽があたる機会は、存外はやく訪れた。県立図書館から「南葵音楽文庫の整理がおわり、すべて公開するのを機に、なにか記念になることが出来れば」との打診。日頃から「好機は2度は来ない」と自戒していたので、一気に提案書を書きあげ、ともに和歌山に来て調査やレクチャーをしている同僚に確認していただいた。2018年4月2日の企画案に盛り込んだのは、徳川頼貞『葎庭楽話』(私家版)復刊、喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』新刊。そして紹介パンフレット『南葵音楽文庫案内(仮)』の3点同時刊行と全国販売。

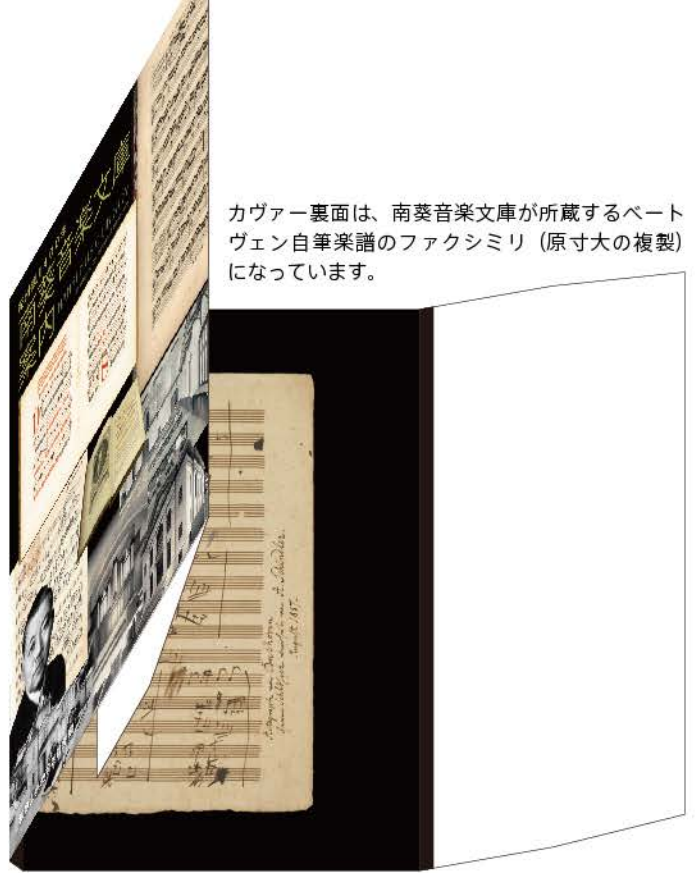
「県は本を刊行した経験がない」というリアクション。だが、この提案が受け入れられたのは、図書館の方々の尽力の賜物だと、その時も今も深謝している。

『楽話』、『横顔』については、出版是非は何も問われなかった。オリジナルは東京の専門図書館に1冊、『横顔』原稿は県立博物館の収蔵庫にあるだけで、出版に相応しいか確認に手間取ったのであろう。

だが、パンフレットは違った。音楽資料紹介だけでなく、歴史を入れて欲しいとの強硬な要望が寄せられた。これには些か狼狽した。なにしろ、和歌山県の歴史を、一度たりとも勉強したことがない。無理だ、誰かに分担をと呻いても返事はなく、参考になる文献はと訊ねても、「初代藩主から徳川頼倫に至る紀州文化史を通覧できる本はない」とのご託宣。なるほど、図書館の郷土史の書棚を隈なく見ても、恰好の書物は見つけれなかった。斯くなるうちは自分で纏めるしかないかと覚悟。その苦境のなかで、県立、市立の博物館の見事な常設展示、特別展とその図録の詳細な解説からは多くをおしえられた。それでも『案内』の最初の2つの章は、最後の最後まで内容が詰まらなく、関係者にも苦勞を掛けてしまった。

素晴らしい励ましもあった。南葵ボランティア(現:

カバー裏面は、南葵音楽文庫が所蔵するベートーヴェン自筆楽譜のファクシミリ(原寸大の複製)になっています。



最後までデザイナー泣かせて悶絶した「成り立ちと継承」(p.25)

冊子としては視覚に訴えかける「ビジュアルガイド」を標榜したが、歴史を溯れば溯るほど、ビジュアルな素材を探し出すのが困難となった。

とりわけ幕末の頃の施設は(それが観光名所とかではなかったため)写真はもちろんのこと、版画や錦絵の類も見つけ出すことができなかった。「葎書印」は苦肉の策といえる。

(谷 卓司)

南葵音楽文庫サポーター)有志の方々と始めた読書会では、県民の学習意欲を肌身で感じた。同時に、深く知りたいのに情報が提供されていない現実を痛感した。

出版準備は、順調に進んだわけではない。原文を、新字新かなに直したいとの要望はあっても、たとえば踊り字をどのように変換するかなど、実際の作業では課題とその解決に追われた。教育委員会の要望で、原文にはない振り仮名を追加しているが、複数の読み方が可能な漢字に、どちらの読みを選ぶか、大いに迷った。

多くの関係者の尽力、協力によって、漸く出版の運びとなったこの3冊。しかし出版は始まりでしかない。有効に利用・活用して、和歌山の教育や学習に資してもらいたい。むしろ徳川頼貞と南葵音楽文庫の理解にも、そして未だ一冊も書かれていない徳川頼倫を評価する書物の登場にも、つながることを期待したい。



徳川頼貞と南葵音楽図書館の真実を語る

喜多村進 『徳川頼貞侯の横顔』

四六判 204p 林淑姫校註



喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』原稿
(第2章「頼貞侯の第一印象」)
和歌山県立博物館蔵

本書について

林淑姫

田山花袋門下の作家喜多村進（1888-1958）が徳川頼貞（1892-1954）とその周辺について綴った「徳川頼貞侯の横顔」（1932）は、90年の長きにわたって原稿のままひっそりと保存されてきました。しかしその佇まいはひとたびページを開けばがらりと印象を変え、若き日の徳川頼貞と南葵文庫、南葵楽堂、南葵音楽図書館の経緯を雄弁に語り始めます。

喜多村進は文筆生活を営む一方で、南葵文庫、南葵音楽図書館の司書、主任司書を務め、のち郷里の和歌山県立図書館に迎えられた人物です。徳川頼貞との最初の出会いは大正5（1916）年春のことで、喜多村は南葵文庫に就職して3年目の28歳、頼貞は24歳で前年暮れにケンブリッジから戻ったばかりでした。その折に頼貞がみ

せた「いかにも明朗とした、こだわりのない、打解けた態度」に喜多村は強く印象づけられます。以来南葵音楽図書館閉鎖までの15年にわたる交際は雇用関係を越えた友情を育むこととなります。

作家ならではの視点と清潔な文体で語られる若き日の頼貞。その人となりと仕事を喜多村は生き生きと共感をこめて描きます。喜多村は自身の創作で南葵文庫、南葵音楽図書館また徳川家に触れることをしませんでした。職業人として公私の別に敏感だった彼らしい選択です。けれども南葵文庫に続いて、南葵音楽図書館もまた崩壊のときを迎えたとき、作家は発表を意図せずとも書かずにはいられなかった。そのときが彼の人生の転機でもあることを直感したからに違いありません。

本書には表題作のほか、南葵文庫の最期を描いた短編「鳩巣を造る」（1931）および頼貞から喜多村に宛てた書簡6通を収めています。「鳩巣を造る」は南葵文庫を題材とした唯一の発表作で、調査過程で新たに発見されました。「徳川頼貞侯の横顔」にほぼ全文が引用されていますが、異同がありますので別に収録しました。書簡は頼貞の生前唯一の著書『菴庭楽話』の成立事情を語る2通（1935、1942）を含みます。全巻を通じて喜多村進が頼貞に抱いた敬愛の情、頼貞が喜多村に寄せた深い信頼を読者は感じとることでしょう。

本書は徳川頼貞と「南葵音楽文庫」の成り立ちを知る第一級の文献でもあります。是非手にとってページを開いてみてください。



喜多村進
(1888-1958)

和歌山県出身。南葵文庫、南葵音楽図書館、和歌山県立図書館に司書として勤務。田山花袋、島崎藤村に師事した文学者でもあり、著書に長編小説『鷹』、短編集『青磁色の春』、エッセイ集『紀州萬華鏡』など。

『菴庭楽話』を読む

— 100年前の歴史を身近に —

江本英雄

今を去ること78年前に出版された『菴庭楽話』という題名の本の存在を、私たちは無論知りませんでした。南葵音楽文庫のことも徳川頼貞という名前もただ何となく知っただけです。ましてや『菴庭楽話』を読んだ人もいないなかで私は、南葵音楽文庫閲覧室で、備え付けの『菴庭楽話』（市販版）を毎週少しずつ読み進め、ほどなく読み了えました。その後発足した『菴庭楽話』の読書会に、筆者は次の年から参加し、幻の私家版にも眼を通しました。音楽に不案内な筆者は、著者の文章のあらわしている

事実を十分に読み解くことができた訳ではないので、折しも『菴庭楽話』（私家版）が再出版されるのを機会にさらにもう一度初めから読み直そうと計画しています。

音楽にまつわるエピソードに満ちた『菴庭楽話』は一面で、日本の、世界の、歴史の流れを記録しています。筆者はそのところに興味を抱き、読み解きの重点を置くようになりました。一見きらびやかな著者の音楽体験、当時の内外の著名な音楽家と直に接した徳川頼貞ならではのエピソードを楽しむ他に、この本がえがく百年以上昔の歴史をたどるのも興味深いことです。音楽随想としてのみでなく、著者の語る約半世紀にわたる同時代史を読み解いていこうというのが筆者の読み方です。その視点で読み進めると解らないことが沢山でてきます。

『菴庭楽話』の楽しみ方として、このような読み方も筆者のみの独りよがりといわれることはないと思います。その中でひとつだけ例を挙げてみます。

著者は四度にわたり欧米を旅行（外遊）しているのですが（『菴庭楽話』には三度めまで書かれる）、三度めの外遊（昭和四年〈1929〉）のとき、著者夫妻はパリに暫く滞在し、そこで著者は同宿のZ夫人というイギリス人女性と仲良くなります。フランス語に堪能なZ夫人はとても頼りになる存在でした。

あるとき著者はシャリアピンとハイフェッツらと会うことになり、たまたま頼貞夫人の為子が同席できなかつたために、Z夫人にホステス役を依頼し、昼食を伴にしました。その場で彼らは妙に席の譲り合い



『薈庭楽話』序

小泉信三

徳川頼貞侯爵が明治、大正、昭和の御代にわたって音楽奨励のために力を尽された功労はまことに没す可からざるものであると思う。さきに侯が南葵楽堂を建設し、大パイプ・オルガンを特に英国で製作せしめてここに備付けられたことは、物の形となって顕れたから多くの人の目にも触れたであろうが、更に世間に聞えぬ方面で、有名な音楽図書のカミングス蒐集を購入して取り寄せられたり、音楽者に費用を給して研究せしめたり、又更に無数の内外音楽家を迎えて或は之を歓待し、或は之を庇護せられたことなど、我が音楽界或は広く我が文化に及ぼした無形の効果に至っては、誠に量り難きものがあるであろう。もとより紀州徳川家の財力と其名声とに由るところも多いとはいえ、現侯爵其人の音楽に対する異常の愛好とその人を待つに殷勤懇篤^{いんきんこんく}到らざるなき深切とを以てするのでなければ到底為し得られざるところであって、今にして顧みて実に景慕に堪えぬところである。

「薈庭楽話」一卷は徳川侯爵の音楽愛好者、奨励者としてのメモリアルであって、著者の地位閥歴からいっても、また東京及び欧洲各地に於ける世界著名の音楽家との往来交歓の多彩極まりなき叙述に於ても、少くも日本に於



ロンドン留学時の記念スナップ (1913) 後列中央が小泉信三
前列左から上田貞次郎、徳川頼貞、鎌田栄吉

をします。ようするに誰がZ夫人の横に座るか取り合いをしているのです。Z夫人は著者によると「英国には稀な美しい大陸型の婦人」だと特筆するほどの美人だったようです。Z夫人の祖父は「嘗てスペイン駐節の英国大使で、エドワード七世時代、モロッコ問題の解決者として英国政界で名声を謳はれた」といいます。

ここからが歴史です。モロッコ問題といっ

の関与を誹謗すると共にドイツの利益を守ることを宣言する短い演説をして引き上げた事件です。フランスは反発、しかもモロッコ国内での反フランス勢力におされたモロッコ政府とフランスの関係も悪化、軍事衝突がいつおこっても不思議ではない状態へと複雑にもつれてゆきます。この時イギリスはフランス側について、外交戦を闘わして国際会議（アルヘシーラス会議）では

小泉信三 (1888-1966)

経済学者。旧紀州藩士の子として東京で生まれ、1933年から46年まで慶應義塾長。頼貞と同時期にケンブリッジ大学に学び、共に旅行をするなど交友した。

ては絶えて他に類例なき著述とすべきものであろう。私は著者が物

語る光景の或ものは親しく自ら目撃したものであるか、本書を読んで侯爵の観察の精しく、又その記憶の実に正確なるに驚いたことは一再でない。本書は独り世の音楽愛好者に読まれるべきのみならず、日本近代の音楽史に貴重なる一資料を加えるものであると思う。

憶えば、侯爵が始めて英国に遊び、主としてケムブリッジで音楽学を勉強せられたのは、第一次欧洲大戦の開戦の前後にまたがる頃であった。当時侯爵の教育指導者は故上田貞次郎氏であったが、同氏がにわかにか校命によって帰朝することとなったので、たまたま戦争のため留学地のドイツからイギリスへ引上げて来ていた私が暫らく其後任を托せられることとなり、従って侯爵と日夕往来するのみならず、しばしば各種の演奏会や音楽家の訪問に御同行するの榮を得たものである。今本書の記述によって、侯爵がイギリスの建築家に南葵楽堂の設計を依頼せらるる時私もまた其席にいたのであったことなどを知り、更に其事からひいて多くの古い人や古い出来事を憶い出した。すべて皆殆んど三十年の昔の事である。私は音楽の事は昔も今も不案内であるが、ただ聴いて楽しむだけなら誰にも劣らず楽しむものである。もとより性分でもあろうけれども、また徳川侯爵の影響にもよることは争うべくもない。私は学問散育の事に関しては何の御役にも立たないで却って此の幸福なる趣味の賜物を受けた。本書の序文を書くという如きはもとより僭越の至りであるが、「薈庭楽話」の出版を最も喜ぶものの一人として、ここに公私取りまぜての記憶と感想とを記し、謹んで著者侯爵及び侯爵夫人の御健康を祈る。

※原文は縦書き。旧字を新字に、一部の漢字をかなに変更した。

ドイツに大きく譲歩させました。この問題はなお後をひき、第二次モロッコ問題もおき、こちらはフランスの譲歩をドイツが勝ち取るのですが、それはエドワード七世が亡くなって後のことで、つまりZ夫人の祖父の活躍の舞台ではありません。この問題は最終的には第一次世界大戦につながります。この祖父の事蹟や名前、イニシャルのみで記されるZ夫人の本名なども知ることができません。著者はこのように歴史的事実を何げなく書いているので、理解するにはずいぶん困難があります。それを探る意欲をかきたててくれるのが『薈庭楽話』だと思います。一度読んだだけでは理解できなかったところも掘り下げて、なおも読みつけていきたいとの思いです。

(筆者は南葵音楽文庫サポーター)

南葵音楽文庫アカデミー
セミナー発表会から
 2021年1月10日 和歌山県立図書館

発表一覧 (敬称略 履修登録順)

- 谷野裕子 「欧米漫遊雑記」(鎌田栄吉・著)を読んで
 中井和佳子 麻布飯倉六丁目十四番地
 蟹井貴代 南葵音楽文庫を理解し活用するための企画
 塚田由里子 南葵音楽文庫から学び、生かされ
 北川 久 私設図書館南葵音楽文庫の充実などのため、昭和2年に徳川頼貞が手放した
 瑞樹比美香 南葵音楽文庫サポーター 和歌山県立美術館を訪問して
 山根基実代 音楽文庫資料利用拡大にも繋がる活動の方針(案)について
 南川慶二 頼貞氏が徳島で聴いたベートーヴェン「第九」とその背景



学芸員の説明を聴く南葵音楽文庫サポーター photo: 中里佳世 和歌山県立近代美術館にて

麻布飯倉六丁目十四番地

中井和佳子

明治維新に伴う版籍奉還と廃藩置県により、藩知事を免ぜられるに接した当時の紀伊徳川家14代当主であった徳川茂承は、和歌山を離れることに嘆く夫人とともに遠く東京へ移った。茂承という人は、明治6(1873)年5月、江戸城本丸炎上の際に焼き出されてしまった明治天皇のために、旧紀伊藩の事実上の上屋敷であった中屋敷赤坂邸(花御殿)を差し上げた。続けて、天皇の所望に応じ、赤坂邸と地続きであった青山邸(青山御殿)をも差し上げた。2度に渡り自身の住まいを献上した茂承自身は、かつての上杉家下屋敷を購入し、手を加えて移り住んだ。それが東京市麻布飯倉六丁目十四番地である。茂承の養嗣子である徳川頼倫が創設した南葵文庫とその愛息子頼貞が愛した南葵音楽文庫のふるさとであり、私の曾祖母の育った地であった。

当時の麻布飯倉は深く木々が生い茂っていたと聞く。そのような場所を、先秋に歩いた。奇しくも昨年令和2(2020)年は、日本で初めて本格的なパイプオルガンが南葵楽堂に設置されて以来100年であった。大正12(1923)年9月の関東大震災を経たパイプオルガンは、現在、東京上野にある旧東京音楽学校奏楽堂に設置されている。

和歌山県立近代美術館を訪問して

瑞樹比美香

【訪問日時】令和2年6月2日 午後

【参加者】南葵音楽文庫サポーター: 江本・蟹井・下西・谷野・瑞樹・塚田・中里(五十音順)

1. 展示物について

和歌山ゆかりの画家さんの作品で、まず興味を引いたのは「高村光太郎作 佐藤春夫像」です。日本歌曲にはこの絵のモデル佐藤春夫の詩がいくつもあり、この絵を前にピシリと心が引き締まりました。新宮の佐藤春夫記念館へもいずれ訪れたいと思います。

◎「徳川頼貞? 風景画」について

画面中央から左下端へ流れる小川、それに添うように歩道があり、遠くには民家が描かれている。頼貞が絵を描いていたことは自身の著書『舊庭楽話』には記載されていない。手紙や楽譜に残されているサイン筆跡とこの「風景画」の右下にあるサインとでは、異なる人物のような気がする。また、後日「徳川頼貞? 風景画」の裏にある葵の紋を拝見させてもらったが、初めて見た紋であった。長保寺住職へその紋を確認していただいたが、住職も同じ意見だった。

その節目を記念して、昨年パイプオルガンの演奏会が催された。飯倉の徳川邸跡を訪れるとてもよい機会だと思った。そして、こころの中のひいおばあちゃんをその地に連れて帰ってあげたいと思った。

当日の朝、宿をとった浜松町付近から歩く。芝公園南からプリンスパークタワーホテルと増上寺を横目に、飯倉の交差点までの坂を上った。その交差点は四辻に警察官が常駐しており、護送車も何台か見られた。各国の大使館があるからであろうか。目指す場所はその交差点を六本木方面に上がった右側一帯にあり、ロシア大使館斜め前であった。父は祖父から「外務省建物辺りに屋敷があった」と聞いていたが、それは外務省飯倉公館及び外交史料館であり、それが本邸であったことが分かった。また同じく「郵便局がある」と言っていたのは、関東大震災後に当時の通信省に売却されたからで、そこに麻布郵便局が建った。この一帯は、数年につづく地域開発のために現在は大工事中である。工事看板には麻布郵便局移転を知らせる紙が貼ってあった。工事をしていた男性に尋ねると、郵便局が移転したことを丁寧に教えてくださった。東北訛りのある方々であったのが印象的であった。また、頼倫が敷地の一隅に建てた南葵文庫跡には、現在麻布小学校が建っている。平成になり南葵育英会が建てた南葵文庫の銘板も、見ることができた。

曾祖母はその邸で育ったことを、自分の子によく話していたそうである。今思えば、遠く和歌山にきたことも寂しかったのもあろうと思う。「広場で遊んだ」ことは父伝いに聞いたことがあった。この南葵アカデミーで学び、その広場が庭園であったかもしれないと思った。頼倫は家庭教育で母子のかかわりを重要とする考えを持っており、庭園にはそうした意味もあったと知った。頼倫のあたたかな眼差しが感じられるエピソードである。

幼少の頃に両親を亡くした曾祖母きょうだいは、頼倫に親代わりで育てていただいた(しかし「頼貞随想」の読書会で息子たちは他家に出されていたことを知った...)。「らいりんちゃん、らいりんちゃん」と曾祖母が慕ったその人は、どのような人であったのだろうかと思った。それを知り得たであらう諸々も、先の大戦で全て焼けた。誠実であられたことはほんやりと分かっていたが、南葵アカデミーで学ぶ中で、頼倫がしてきたことを知り、大変に真面目で思いやり深いお人柄であったであろうと感じた。また、明治維新から怒涛の時代を徳川として生き抜いた在り方と誇りを思う時、自分にできることは何か、という一点が、彼を彼ならしめていたと感じる。悔しいこともたくさんあったろう。熊楠との英国でのエピソードも、謙虚でしかない。本当に惜しい人であったと思えてならないが、その功績を思う時、感謝しかないのである。

「東京の画廊で購入」とのことなので、紀州徳川家ではなくおそらく他の徳川家の方ではないのかと思う。あともう一つ考えられるのは、個人紋かもしれないが、これに関しては全くわからない。

2. 特別に見せていただいた貴重資料について

◎「浜地作 徳川頼貞肖像画」 同じものが三枚 白いカバーには何も書かれておらず、「三鍬形紋」の活版。

白い表紙を開くと右ページ全体に頼貞膝から頭頂部までの肖像画。(カラー印刷のように見えた) 正装姿。

YORISADA
 SIXTEENTH IN SUCCESSION YORINOBU OF KII.
 THIRD MARQUIS TOKUGAWA
 BY S. HAMACHI
 の記載有り

三鍬形紋は紀州徳川家初代藩主が使用していた馬印なので、紀州徳川家が古くから家内で使用していた紋である。複写とのことで、原画の所在は不明。

◎短歌

鳥の子紙のような地に金箔の色紙

表面:

紀の海乃(の)

あらしし本路(ほんじ・ほじ) 二(に)

いさこ起(き) 行(い) 可(か) む
 知(ち) か良(ら) 合世(せ) 亭(て)

頼貞

裏面: 為子書

紀州の海にいざ漕ぎだそうという気迫を感じる歌である。

二行目の変体仮名「さ」は合っているか不明だが、調べあげた結果「さ」が有力である。

◎写真12枚

徳川頼貞家の家族写真やパーティーの写真。頼貞1人の紋付袴写真(自筆「Yorisada Tokyo may 1939」)は南葵楽堂前の集合写真の加工写真のように見える。※要確認

◎絵葉書4枚

内3枚は頼貞から浜地へ送られたもの。あとの1枚は差出人が「内田一郎」となっている。

近代美術館訪問を終えて

この度は大変貴重な機会をいただきました。浜地氏と頼貞氏との繋がりとなる品々を拝見できたことで、また新たな「頼貞」が見えてきました。近代美術館、そして学芸員の方、この日のために動いてくださった南葵サポーターのメンバーに深く感謝申し上げます。

夏	7/10(土) 和歌山県公館	井戸慶治「徳川頼貞と板東ドイツ兵捕虜の音楽活動」 佐々木勉「南葵音楽文庫に生きるW.H.カミングス」
	7/11(日) 和歌山県公館	泉 健「三浦環：1914年—ベルリンからロンドンへ」 近藤秀樹「熟覧と細見(2) アルベニス《スペイン風セレナータ》」
秋	9/18(土) 橋本市教育文化会館 3階 第1研修室	
	9/19(日) 和歌山県立図書館(本館) 2階 講義研修室	林淑姫「シャルル・ルルーと南葵文庫」 美山良夫「徳川頼貞とホルマン：100年目の友情」
冬	11/20(土) 和歌山県立図書館(本館) 2階 講義研修室(予定)	
	時間未定	紀の国わかやま文化祭2021(内容調整中)
春	2/19(土) 新宮市(会場未定)	
	2/20(日) 和歌山県立図書館(本館) 2階 講義研修室	(内容調整中)



※講師、申込方法等の詳細は、南葵音楽文庫アカデミーのWEBをご覧ください。→ <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/>

【INFORMATION】

復刊『薈庭楽話』+遺稿集『頼貞随想』 読書会 6月から新スタート

2021年3月23日、いよいよ徳川頼貞『薈庭楽話』(私家版)が中央公論新社から復刊されます。2021年度は、これら2つを読み比べながら、深い理解につなげてゆきます。(紀州徳川読書会：蟹井貴代)

*教材：『薈庭楽話』と『頼貞随想』

*日時：2021年6月9日10:00~12:00

*会場：和歌山県立図書館1階サロン



~学び、楽しみをご一緒に~

南葵音楽文庫サポーターごあんない

和歌山県立図書館が所蔵・公開している南葵音楽文庫を通じ、音楽、和歌山、歴史etc.を愛する人々が、各々の提案により、学び・楽しみを見つける集まりです。会則、会費、会長等はなく、一人ひとりが主役のプラットフォームで、どなたでも参加できます。2020年度は、有志により、徳川頼貞の遺稿集『頼貞随想』を、月1回のペースで、少しずつ読んできました。

今までの活動

読書会のほか、2020年度は和歌山県立近代美術館や「第九」初演の地に建つドイツ館(徳島県鳴門市)を訪ね、作品や関係資料の見学会をおこないました。それに先立つ「南葵ボランティア」と称していたときには『薈庭楽話』読書会、「南葵かわら版」の編集発行、オリジナルのクリアファイル作成を、それぞれ有志が集っておこなってきました。

これからの活動

上記読書会以外の活動については、見学会、音楽会など提案を持ちより、個々に関心のある有志により実施してゆきます。興味のある方は、お気軽に各サポーターまで、またはメールにてお問い合わせ下さい。

(nankibunka@gmail.com)

南葵音楽文庫寄託5周年 記念演奏会

2021年6月8日

和歌山県民文化会館

ネイラー 序曲「徳川頼貞」

グリーグ ピアノ協奏曲

イ短調 作品16

ベートーヴェン 交響曲

第7番 イ長調 作品92



『地方史研究の最前線 紀州・和歌山』

和歌山地方史研究会編 清文堂 259ページ

古代から近・現代にいたる和歌山の悠久の歴史が、それを切り取る68もの窓から語られる。小さな窓は1ページ。大きくても数ページの窓。その窓を開けて、読者を和歌山の歴史を彩る光景に誘うのは、和歌山地方史研究会の面々。教員、学芸員、行政職など立場も年齢もさまざま。地味な外見の書物ながら、和歌山を愛し、その歴史を深耕しようという熱意が溢れている。紀州徳川家が見える窓はいくつもあるが、それらの窓のさき、徳川頼倫、頼貞の姿は見えない。『紀州徳川400年 南葵音楽文庫案内』に興味をもたれ、さらに関心を広げ、紀州・和歌山をより広く、深く知ろうとするとき、最初に手に取るべき最新の手引書である。(編集子)

南葵からひろがる1冊

南葵文華第3号

令和3年3月31日発行

発行所

和歌山県立図書館

〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集

合同会社芸術資源研究所

〒640-8329 和歌山市田中町5-1-1 タバビル704

編集協力

有限会社ティアンドティ・デザインラボ

〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36